

平城宮跡第197次東区発掘調査の概要

1989年2月4日

奈良国立文化財研究所

平城宮跡発掘調査部

佐川 正敏

1. 調査の経緯

奈良そごう建設に対する発掘調査は、敷地面積約4万㎡のうち3万㎡を調査対象として1986年10月から開始した。これまでの6次にわたる調査でこのうちの2万5千㎡の調査を終了し、調査成果はそのつど公表してきた(図2)。

奈良そごう建設地が平城京の中で占める位置は、北を二条大路、東を東二坊坊間路、南を三条条間路、西を東一坊大路に囲まれた、左京三条二坊一・二・七・八坪にあたり、この4坪をほぼ含んでいる(図1)。

昨年までの調査の結果、奈良時代のこの宅地の基本的変遷がほぼ明らかになった(図4)。A期：奈良時代前期において少なくとも4坪を一つの邸宅として使用していたこと、B期：奈良時代中期において坪境小路(坪の間を分割する道路)が設置され、1坪毎に土地を使用していたこと、C期：奈良時代後期前半において再び少なくとも4坪を一つの邸宅として使用し、D期：奈良時代後期後半において再び坪境小路が復活することがわかった。とくにA期の大邸宅内には建坪340㎡の主殿をはじめとする大規模な建物が塀や通路で区画されながら建ち並んでいた。しかも、出土した木簡から、この邸宅に天平元(729)年2月12日に悲劇の死を遂げた長屋王、吉備内親王等が住んでいたこともわかった。

さて、第197次調査の目的は長屋王邸の北西部分、すなわち一坪の利用状況と第186次調査で発見された長屋王邸内のL字形の通路の行方、坪境小路と二条大路の交差点の状況等を解明することである。調査は継続中であるが、調査区の東北半部が砂地であり、遺構の手当を必要とすることから、東区の調査成果の公表を先にすることにした。また、東二坊坊間路西側溝と二条大路南側溝の交点付近の調査(193次B区補足)とこの調査区から近鉄線をはさんで北側の二条大路の調査(198次A区)も平行して進行中である。

2. 調査の概要(図3)

197次東区の調査で検出した遺構は掘立柱建物8棟、門1棟、掘立柱塀8条、道路4条、溝5条である。これらの大半は奈良時代の遺構であるが、平城京廃都

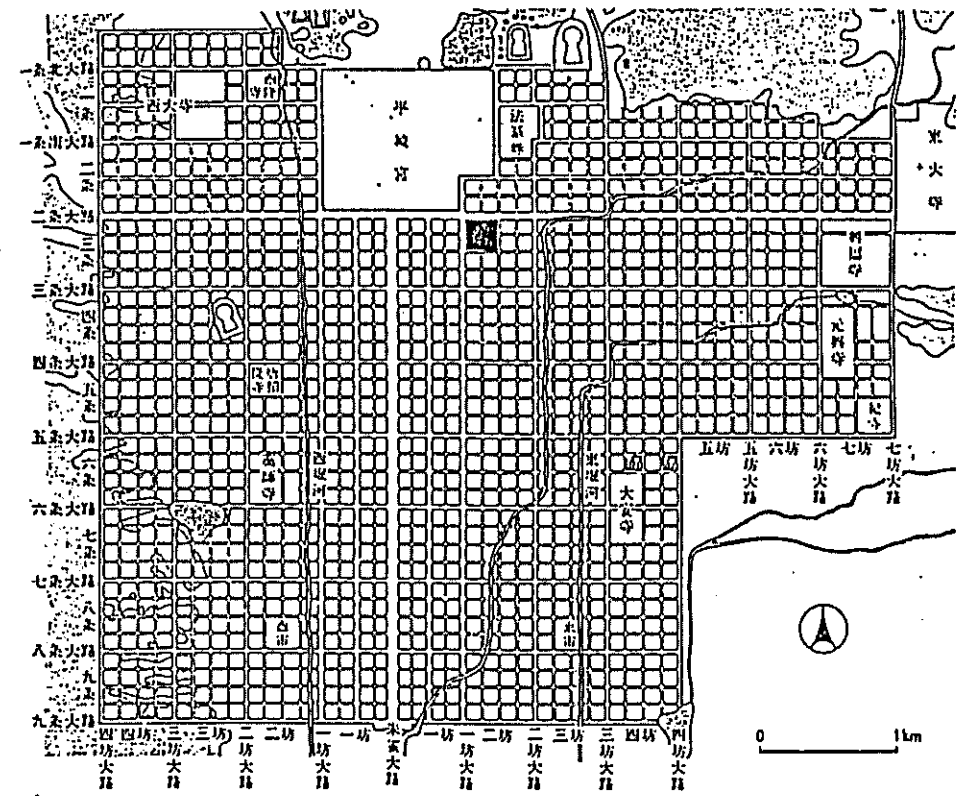


図1 調査地位置図

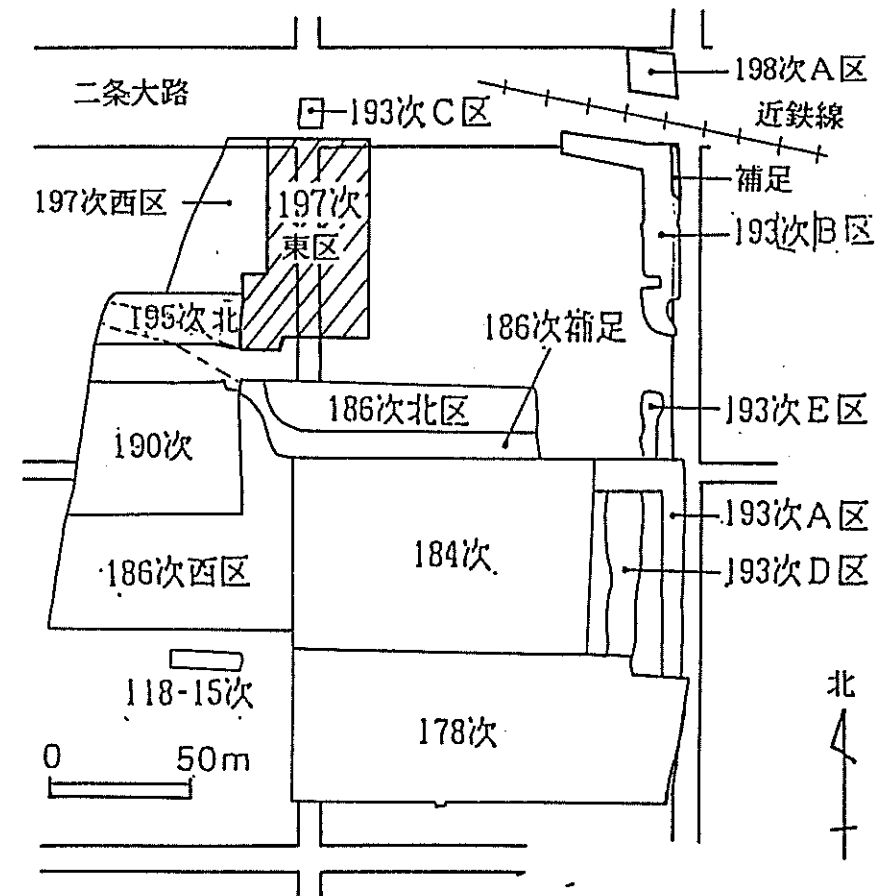


図2 調査区位置図

後の遺構もある。

①奈良時代の遺構

A期（奈良時代前期）：一坪と八坪の間に坪境小路がない、一・二・七・八坪を一つの邸宅としていた時期。邸宅北辺には、東辺（東二坊坊間路沿い）と異なり（東辺では掘立て柱塀→築地塀という変遷）最初から二条大路（道路1）に面して東西の築地塀（築地塀1、2）が設けられ、南北に雨落ち溝（溝2、3）をもつ。築地塀のいっかくには二条大路に面して掘立柱の門（門1）が設けられている（柱穴から出土した土器の年代からもA期の門と考えるのが妥当）。大路に面する門の遺構が発見されたのは、平城宮を除くと今回が初めてである。この門は間口が約3.9mで、その中心が一・八坪の境界線上に位置する。この門へは邸宅中枢部から幅13.5m（45尺）の通路（道路2）が延びている。この通路は186次調査で検出されたL字形通路の北の延長部分にあたる。通路の両側には掘立柱塀が南北に延び、邸宅北部の敷地を東西に分けている。東側の塀（塀1）は築地の南雨落ち溝の手前まで続き、西側の塀は（塀2）築地の手前約14mで西へ曲がる（塀3）。この塀3と築地との間は西へ続く通路（道路4）となる。塀2と3で囲まれた敷地の使用状況は本調査ではまだ不明である。塀1の東側の敷地には東西約7m（3間）、南北約24m（9間）の長大な掘立て柱建物（建物1）がある。建物1のすぐ南には南北塀（塀4）が取り付く。塀4のさらに南には少なくとも西に庇をもつ建物（建物3）がある。

B期（奈良時代中期）：一坪と八坪の境に東西に側溝（溝4、5）をもつ坪境小路（道路4）が設けられ、一、二、七、八坪がそれぞれ独立して使用される。この時A期の門、塀、建物は柱が抜き取られたり、鋸で切断され、解体される。各坪の周囲は築地で仕切られていたと推定される。一坪内では東西6m（2間）、南北14m（5間）の建物6と塀8が、八坪内では建物4がある。

C期（奈良時代後期）：坪境小路の側溝が埋め立てられ、再び一、二、七、八坪が一体として使用される。この時期の建物には東では東西3m（2間）、南北4.5m（3間）の倉庫風の建物2、その南に東西6m以上、南北6m以上の建物5、西では東、西、南に庇をもつ東西15.6m（5間）、南北9m（3間）の建物7がある。建物7の北と南には塀5、塀6がある。A期に通路、B期に坪境小路であったところには建物にはなく、C期でもなんらかの通路として使用されてい

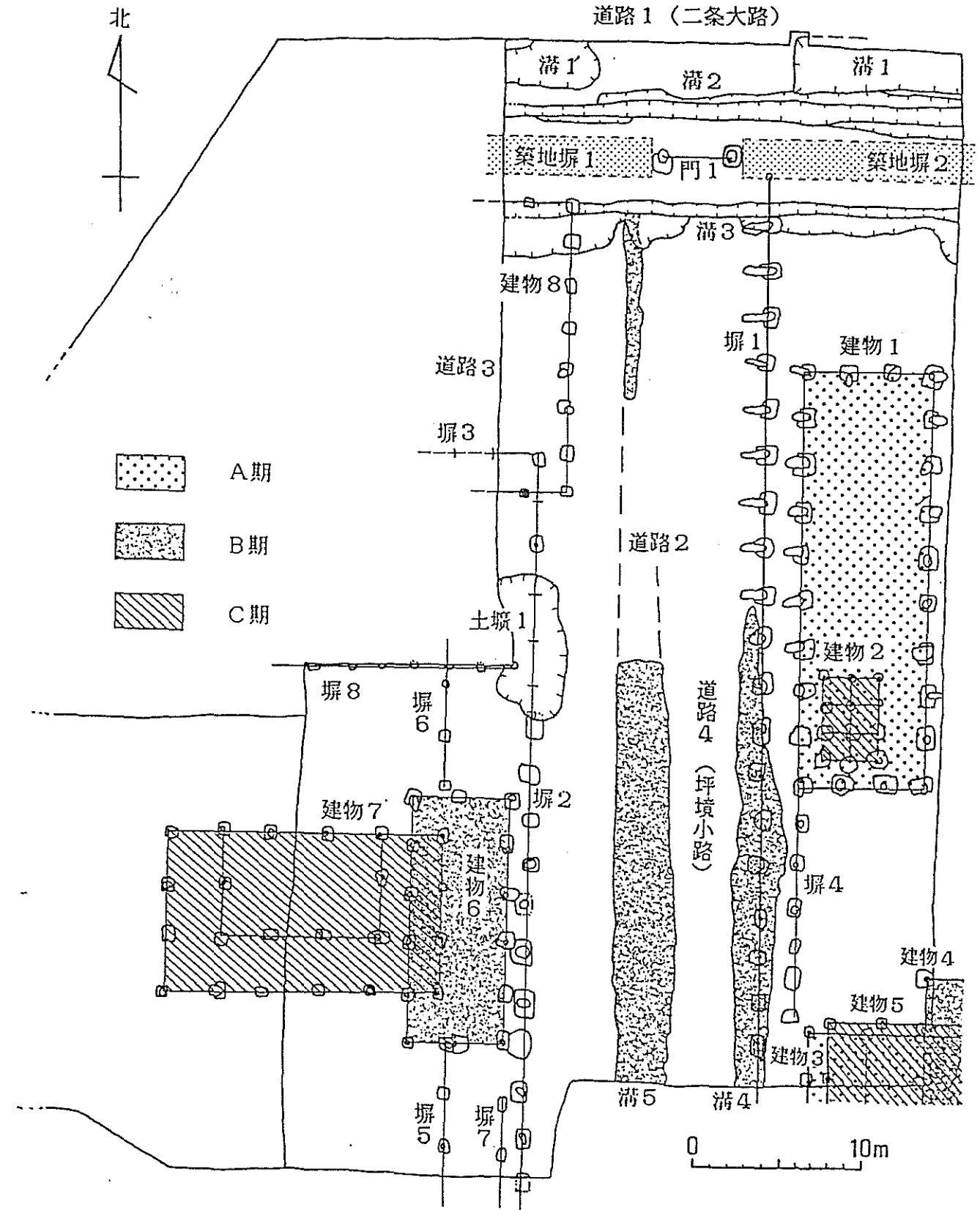


図3 197次東区検出遺構

た可能性がある。しかし、二条大路に面して門があったか、否かについては、少なくとも掘立柱の門はなかったが、礎石建ちの存在については検証のしようがなく、結論は出せない。

D期（奈良時代後期）：坪境小路と側溝が復活して、再び各坪毎に土地が使用される。この時期の建物は本調査区内ではない。

②長岡京遷都後の遺構

築地の南雨落ち溝（溝3）埋め立て後に東西約5m（2間以上）、南北約17m（7間）の建物8が建てられる。また、現在一部進行中の197次西区では遷都時に不用になった築地の瓦を溝に捨てた状態が検出されている。

3. 調査の成果と課題

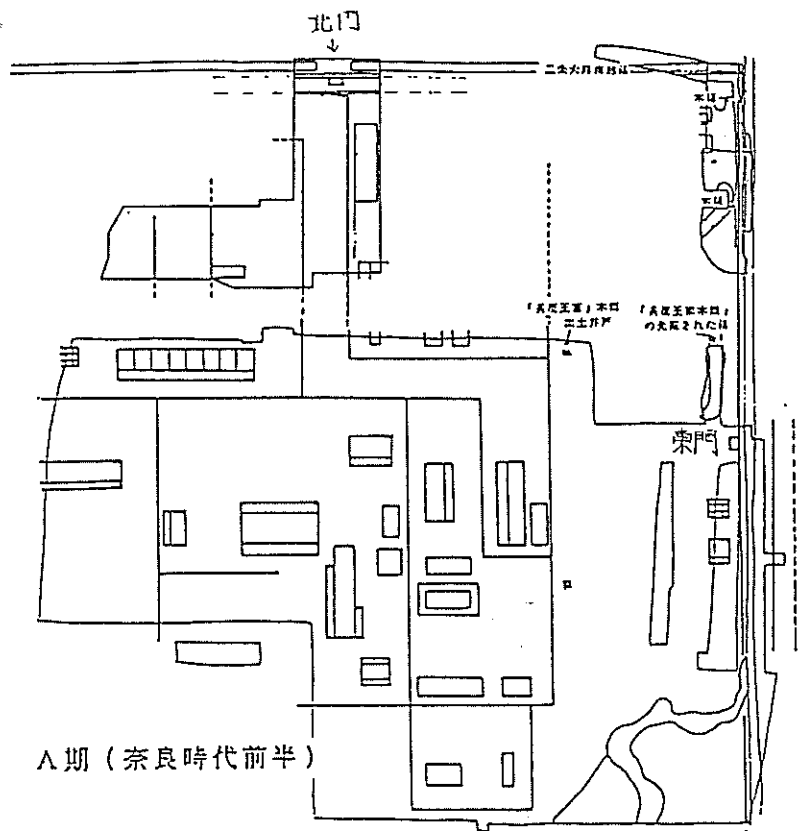
①初めて発見された大路に開く門：A期の長屋王邸の北辺の築地には二条大路に開く門があった。これで長屋王邸には東二坊坊間路に開く東門を含めて少なくとも2つの門があったことが明らかになった。大路に面する門が発見されたのは平城京では今回が初めてである。当時大路に面して誰もが門をもつことができたわけではない。天平3（731）年9月2日、平城京を管理する役所の左右京職が次のような命令を下したことが続日本紀の巻11に見える。「三位以上の者が邸宅の門を大路に面して建てることはすでに許可されている。その邸宅の主が死亡したとき邸宅の門はどのように処分すべきか、いままで明確に規定しなかった。天皇の命令によって、今後主人が死亡した場合、邸宅の門は処分しなければならないことになった。」長屋王は藤原京から平城京へ遷都した和銅3（710）年にはすでに従三位であったから、この邸宅には当初から二条大路に面する門があっても矛盾はない。天平元（729）年2月12日長屋王、吉備内親王自尽後坪境小路が設置されるまでの間で、邸宅は解体され、北門も撤去されたのであろう。

②門の位置と北門の重要性：長屋王邸では北門と東門が発見されている。これらの門の中軸線はそれぞれ一・八坪の境界線と七・八坪の境界線にほぼ一致する。したがって、条坊道路に面する北門、東門などの配置は条坊計画線を基準としていたといえる。これに対し、邸宅内の建坪360㎡の正殿風の建物の中軸線は坪の境界線と一致しない。また、長屋王邸初期の建物や堀はともかく、増改築はその時々状況に応じて区画堀などを基準としていたと考えられる。ところで、東門と邸内中枢部分の間には特別な施設（通路の堀など）がないのにたいして、北門と

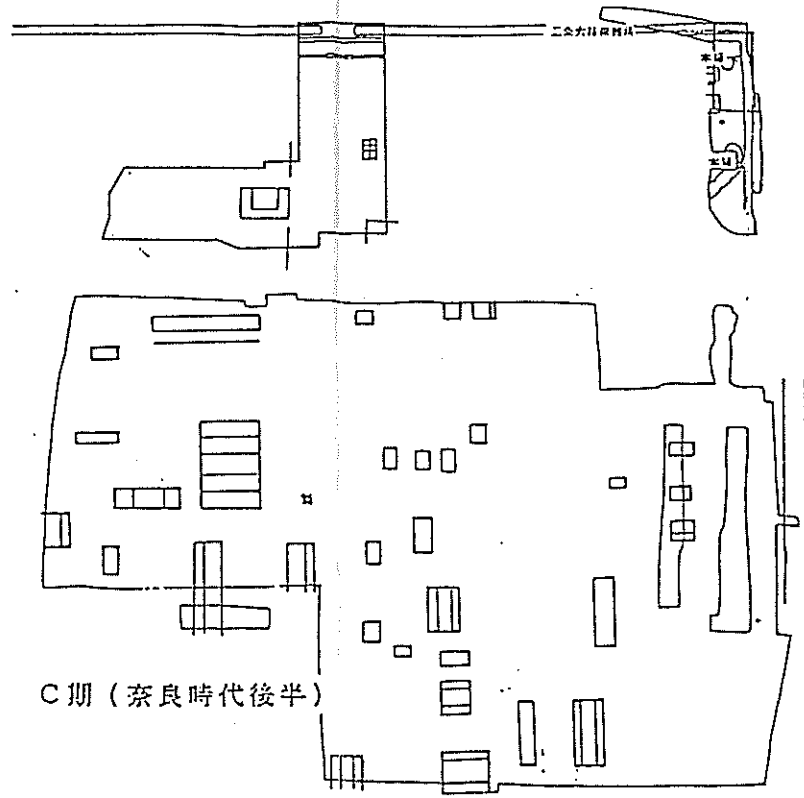
邸内中枢部分は幅40尺と45尺の幅広いL字形の通路で結ばれている。この通路がこのような幅をもち、北門に直接通ずる位置にあることは、北門が建物中枢部との関係で重要な意味をもっていたことを示す。すなわちこの門が長屋王らの宮へ出所する時の主要な通用口だった可能性が高い。

③長屋王邸の西北と東北の区画：北門への通路と堀によって東西に区画されたブロックは邸内北端まで広がっていることが明らかになった。東北ブロックには多くの建物の存在が十分想定できるが、西北ブロックは今のところ希薄であり、197次西区の調査に期待したい。

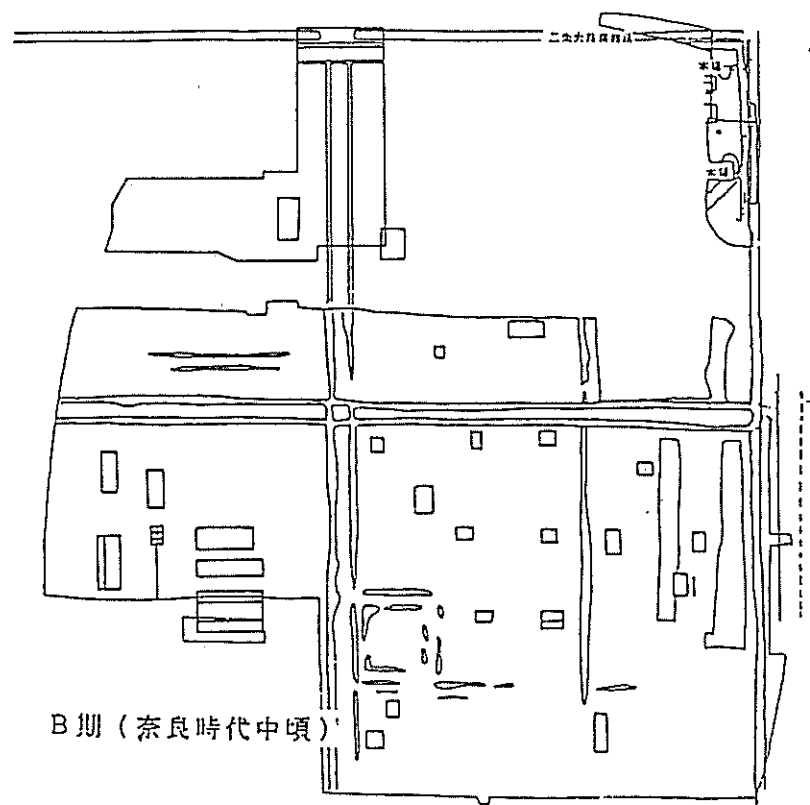
④二条大路南側溝の問題：敷地の北面の築地想定位置の北の溝2と南の溝3は、築地との関わりで理解できる溝である。北門の東西線が溝2、3の芯の中央に位置し、197次西区でこれらの溝に築地のものと考えられる瓦が捨てられていることがそれを示そう。溝2、3ともに敷地東面の築地まで続くことが判明している。溝2は平城宮に面する二条大路の南側溝の延長上にほぼ位置する。溝2の北には溝1があり、従来これを二条大路南側溝ではないか考えてきた。溝1は北門、坪境小路の北側にあたる部分が途切れる。明らかに南からの出入りを意識した途切れ方である。この溝1も敷地の東辺まで続くことが193次B区で知られており、東二坊々間路西側溝に注ぐであろうと推定されていたが、現在進行中の193次B区補足調査で東二坊々間路西側溝の手前約1mのところを外堀のように途切れることが判明した。一方、敷地の西端の東一坊大路寄りの第32次調査では溝1に対応する溝はない。現在溝1と2の関係、二条大路南側溝はどれかという問題について遺物等から検討を行なっているところである。



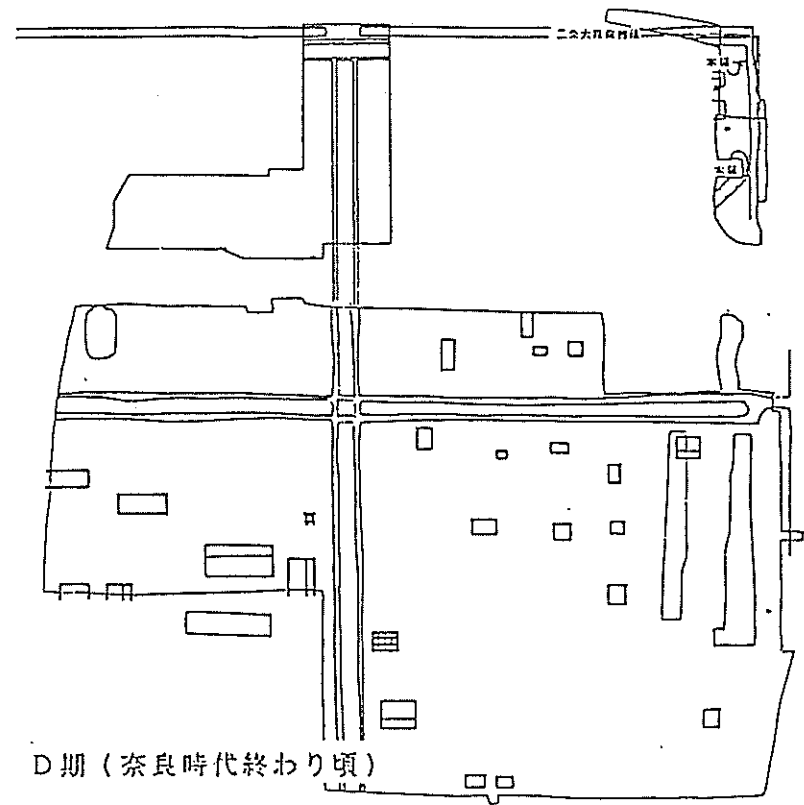
A期 (奈良時代前半)



C期 (奈良時代後半)



B期 (奈良時代中頃)

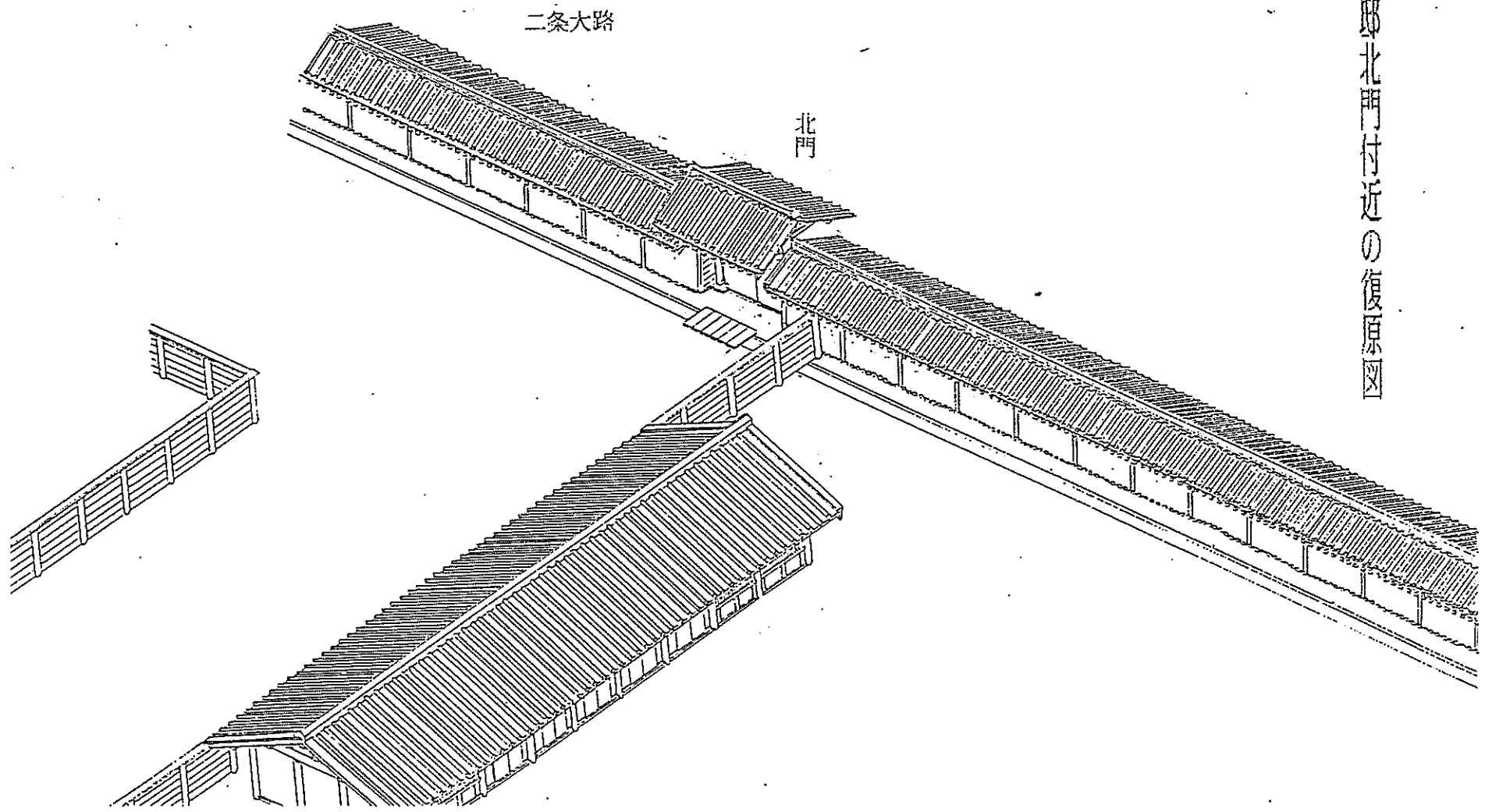


D期 (奈良時代終わり頃)

図4 左京三條二坊一・二・七・八坪遺構変遷

〔續日本紀卷十二〕天平三年九月二日、左右京職言、三位已上宅門、建於大路、先已聽許、未審、身
 薨、宅門若爲處分、勅、亡者宅門、不在建例
 〔三代實錄卷十八〕貞觀十二年十二月廿五日、制、三位已上及四位參議家門、聽建大路、薨卒之後、
 子孫居住者、亦聽之
 延喜式卷四十二 左右京職 凡大路建門屋者、三位已上及參議聽之、雖身薨卒、子孫居住之間亦聽、

參考資料



二条大路南側溝出土木簡

□茂郡賀茂郷川合里戸主少初位下生部博士口生部広国調荒堅魚十一斤十兩

天平七年十月

隱伎国周吉郡 新野郷丹志里宗我部 阿久多調烏賊六斤 天平七年

伊豆国賀茂郡築間郷蘇沼里戸主穴田部吉備調荒堅魚十一斤十兩 天平七年十月

八連七節

伊豆国田方郡久寝郷坂上里日下部速麻呂調荒堅魚十一斤十兩

天平七年十月

伊豆国賀茂郡賀茂郷題詩里戸主矢田部刀良麻呂口矢田部刀良調荒堅魚十一斤十兩十一連二丸 天平七年十月

駿河国駿河郡古家郷猪津里戸金刺舎人勝麻呂調荒堅魚六連八節

天平七年十月

安房国安房郡大井郷小野里戸主城部忍麻呂戸城部稻麻呂輪調口斤 六十口 天平七年十月